

Title	<論文>Pride and Prejudice における理想の結婚 --エリザベスとダーシーの父親観を通して--
Author(s)	高橋, 一馬
Citation	文芸表象論集 = Literary Arts and Representation (2017), 5: 24-39
Issue Date	2017-12-31
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/LAR_5_24">https://doi.org/10.14989/LAR_5_24</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

*Pride and Prejudice* における理想の結婚  
——エリザベスとダーシーの父親観を通して——

高橋 一馬

はじめに

キャロル・シールズは、ジェイン・オースティン (Jane Austen) の *Pride and Prejudice* (1813; 以下『高慢と偏見』と記す) を評して、「最も幸福な小説」と述べている (Shields 76)。シールズによればそれは、Elizabeth と Darcy の結婚が、オースティンの作品の中でも最も理想的な結婚であることに起因している。では、オースティンにとって、理想の結婚の最も重要な条件とは何だったのだろうか。

作品の中心となるベネット家において、一家の主 Mr. Bennet は、自身の結婚が失敗であったことを認め、自らの力で幸福な家庭を築くことを放棄している。その反面、彼は自分のお気に入りの娘である Elizabeth が、理想の結婚相手と出会い、自らと同じ過ちを繰り返さないことを強く願っている。Mr. Bennet が結婚相手を選択する際に最も重視していることは何か。それは物語の終盤において、Darcy との婚約を決心した Elizabeth に向けられた、Mr. Bennet 自身の言葉から推測できる。“We all know him [Mr. Darcy] to be a proud, unpleasant sort of man; but this would be nothing if you really liked him.” (356) と彼は述べており、その信条が表れている。

結婚する相手のことを、“really liked”といえるほどに思っていることが、理想的な結婚の絶対的な条件だという Mr. Bennet の言葉は、作者オースティンの理想とも共通している。彼女は、姪のファニー・ナイトから結婚に関する相談を受けたとき、以下のような忠告の手紙を書き送っている。

...I shall turn round & entreat you not to commit yourself farther, & not to think of accepting him [Mr. J.P.] unless you really do like him. Anything is to be preferred or endured rather than marrying without Affection... (Faye 292)

“you really do like him”という言葉は、Mr. Bennet が求める条件と一致する。さらにその考え方は、長女 Jane にも共有されている。Darcy と妹 Elizabeth の婚約を知らされた Jane は、Elizabeth に真っ先にこう尋ねる。“And do you really love him quite well enough? Oh, Lizzy! do any thing rather than marry without affection. Are you quite sure that you feel what you ought to do?” (353) ここにも、先に引用したオースティンの言葉が反復されている。このように、本当に結婚相手を愛しているのかという問いに、Elizabeth は繰り返し答えている。そうやって Darcy への想いを確かにする彼女は、

作者オースティンから見ても、理想的な結婚をした女主人公と考えられる。

では、Elizabeth が理想の相手である Darcy と結ばれることができたのは、この父親の教育の賜物と言えるだろうか。おそらく答えは否である。というのも、Elizabeth が、Mr. Bennet の夫、あるいは父親としての役割が不十分であることに不満を抱いている場面が、作中に描かれているからである。それなら、Elizabeth はどのように理想の結婚相手として Darcy を選ぶに至ったのか。本論では、父親 Mr. Bennet と娘 Elizabeth との関係性を足掛かりに、その問題について考察する。

## 第一章 父親としての Mr. Bennet

### 1-1. Mr. Bennet と Elizabeth の関係性

『高慢と偏見』において、ベネット家の父親である Mr. Bennet と、次女 Elizabeth との関係は、概ね良好なものである。特に、Mr. Bennet にとって Elizabeth は自慢の娘であり、他の四人の娘とも一線を画す扱いをしている。それは、物語の序盤で彼が以下のような発言をしていることからもうかがえる。

“They [Mr. Bennet’s daughters] have none of them much to recommend them,” replied he [Mr. Bennet]; “they are all silly and ignorant like other girls; but Lizzy has something more of quickness than her sisters.” (6-7)<sup>1)</sup>

Mr. Bennet は、自分の娘たちが「みな愚かで無知」であると認識しているものの、Elizabeth には“something more of quickness”が備わっていると考え、彼女に強い思い入れを抱いている。Mr. Bennet が近隣の住民の中でも、早くにネザーフィールド屋敷の Bingley を訪問したのは、Elizabeth にとって良い縁談を期待してのことであろう（新井 126）。

しかし、母親である Mrs. Bennet は、次のように Elizabeth に関して父親とは対照的な評価を下している。“Lizzy is not a bit better than the others; and I am sure she is not half so handsome as Jane, nor half so good humoured as Lydia.” (6) Elizabeth の立場からすれば、母親と比べて、父親に対してより強い愛情や尊敬の念を抱いたとしても不思議ではない。

その一方で、Elizabeth は先述のとおり、Mr. Bennet に対して、不満を抱く場面が垣間見える。それは、例えば三女の Mary が、十分な技量を持ち合わせていないのに、公衆を前にピアノを演奏してしまう、次のような場面に表れている。

She [Elizabeth] looked at his [Bingley’s] two sisters, and saw them making signs of derision at each other, and at Darcy, who continued however impenetrably grave.

She looked at her father to entreat his interference, lest Mary should be singing all night. He took the hint, and when Mary had finished her second song, said aloud, “That will do extremely well, child. You have delighted us long enough. Let the other young ladies have time to exhibit.”

Mary, though pretending not to hear, was somewhat disconcerted; and Elizabeth sorry for her, and sorry for her father’s speech, was afraid her anxiety had done no good. (98)

Mr. Bennet と Elizabeth は、視線を送りあうだけで意思疎通ができるほどには良い関係を築けている反面、彼女が父親のやり方に、素直に賛同できずにいることも確かである。とはいえ、この段階での Mr. Bennet に対する Elizabeth の不満は、抑制されたものであり、それを言葉にして父親に直接伝えることは、物語の序盤では行われていない。上に引用した場面においても、結局は自分の気づかいが全く良いように働かなかったのではないかと考えて、父親ではなく、きっかけを作った自分自身を責めている。多少の不満を抱きながらも、Elizabeth は父親を尊敬し、「良き娘」の役割を全うしていると言えよう。

## 1-2. Mr. Bennet の教育

Mr. Bennet の夫や父親としての役割を否定的に述べた論文の中で、坂田は以下のように述べている。

五人の娘たちは下へ行けば行くほどしつけがなっていないことが示唆するように、ベネット氏はおそらく当初は（多分次女エリザベスあたりまでは）子供の教育に参加していたのかもしれないが、途中から子育てへの参加を完全に放棄し、総てをベネット夫人に任せきりであったと思われる。（坂田 53）

五人の娘たちの教育に関してはほとんど言及がないため、我々読者は彼女たちがどのような教育を受けてきたのかを、少ない描写と、娘たちの性格などから推測するしかない。坂田が指摘するように、Mr. Bennet は、途中まで教育に参加したのだろうか。ここでは、Mr. Bennet の教育がどのような変遷を辿ったのか、そしてそれが、Elizabeth を始めとする娘たちにどう影響を与えたのかを考察する。

長女の Jane は、美貌を持ち、人を疑うことを知らないという、理想的な人物として描かれている。Jane には、Mr. Bennet の皮肉屋としての一面に似た点が少しも見られない。このことは、彼女が両親の愛情を一身に受けて育ったことを表していると考えてよいだろう。長女とは対照的に、次女の Elizabeth には、Mr. Bennet の性格

が色濃く表れている。Mrs. Bennet は、Elizabeth の容姿に関して、“not half so handsome as Jane”と述べている。この発言から、まだ幼い姉妹の内、姉の Jane に Mrs. Bennet が夢中になっていたことは想像がつく。それなら、妹の Elizabeth は Mr. Bennet が相手をする機会は必然的に増えるということになる。そのため、Elizabeth には Mr. Bennet の性格が大きく影響を及ぼしたと考えられる。また、ベネット家の教育方針として、家庭教師は雇わないことが、Elizabeth と Lady Catherine との会話で明らかになっている。Lady Catherine は、ベネット家の娘たちが絵を書かないのを不思議に思い、“Your mother should have taken you to town every spring for the benefit of masters.”と述べる。それに対し Elizabeth は、母は異論ないだろうが、父がロンドン嫌いなのだと応じる。さらに Lady Catherine は、家庭教師を雇ったことがないと知るや、“No governess! How was that possible? Five daughters brought up at home without a governess! —I never heard of such a thing. Your mother must have been quite a slave to your education.”と述べて、驚きを隠さない。最後の一言を受けて、“Elizabeth could hardly help smiling as she assured her that had not been the case” (161) と述べられているように、彼女は微笑みを抑えられない。この一連の対話から分かるのは、Mr. Bennet の一存で娘たちは絵を習っていないこと。そして、Mrs. Bennet が教育熱心ではないという事実である。少なくとも、Elizabeth は母親の教育に対する熱意を否定している。それなら、ベネット家の娘たちの教育は、次女がある程度育った後、「総てをベネット夫人に任せきり」ではなく、むしろ Mr. Bennet に依るところも、幾分かあったのではないだろうか。

それを裏付けるような対話が、Lady Catherine と Elizabeth の間でなされている。Lady Catherine は、Bennet 家の娘たちが放任されていた (neglected) のではないかと尋ねる。その問いに、Elizabeth は以下のように答えている。

“Compared with some families, I believe we were; but such of us as wished to learn, never wanted the means. We were always encouraged to read, and had all the masters that were necessary. Those who chose to be idle, certainly might.” (161)

Elizabeth は、自分たちがある程度は放任されていたことは認めながらも、“always encouraged to read”と言っている。おそらく、読書をすすめたのは Mr. Bennet であろう。

では、“Those who chose to be idle”とは誰のことだろうか。三女の Mary は、ピアノの腕前が人前で披露出来るほどではないことが分かっている。その反面、読書には時間をかけてきたようだ。彼女は、Mrs. Bennet から最もかけ離れた性格の持ち主である。Mr. Bennet の読書をせよとの助言だけを、Mary は真摯に守り続けたと思われる。

る。結果として、銜学的な本の虫という、現在の彼女が出来上がったのである<sup>2)</sup>。

四女と末娘の Kitty と Lydia に関しては、物語の終盤において Lydia が駆け落ちを試みるまでは、二人一組で描かれる場面が多い。末娘の Lydia は、母親の一番のお気に入りであり、そのため彼女が最も Mrs. Bennet と考え方が似ている。Lydia や Kitty は、あまり教養があるようには描かれていない。Elizabeth が指摘した、“Those who chose to be idle”とは、彼女たちであると考えられる。Elizabeth の妹たちに向けられた批判は、間接的にはあれ、母親の教育に対する批判としても受け取ることができる。

このように娘たちの特徴を観察すると、Bennet 夫妻の関係性がその背景として浮かび上がってくる。Mrs. Bennet は教育に関しては関心が薄く、父親はロンドン嫌いから娘たちを家から出さないために、娘たちの自主性に頼るような状態が発生している。それと同時に、ベネット家の教育方針が、どのような影響を娘たちに与えたかも、うかがい知ることができるのである。

こういった環境の中で育ってきた Elizabeth だが、上述の引用などから分かるとおり、彼女は両親の教育方針を批判してはいない。確かに坂田の指摘したように、Mr. Bennet が、三女 Mary が生まれた辺りから、教育に積極的な姿勢を見せなくなったことは確かであろう。しかし、全てを Mrs. Bennet に任せていたとは考えにくいのである。Elizabeth が父親に対する尊敬が失われないのは、そういった事情に一因があるのかもしれない。

## 第二章 新しい価値観の芽生え

### 2-1. 崩壊する既存の価値観

Elizabeth は、物語の中盤において、唐突に Darcy に求婚され、激しい言葉と共にそれを拒否する。彼女が Darcy に強く反発したのは、彼が両者の間の階級差を大仰な言葉で強調したからである。そしてそのさい、Elizabeth は二つの主な理由を、求婚を受け入れない理由として Darcy に告げる。一つは、彼が姉の Jane と Bingley の間に割って入り、その交際の発展を妨害したこと。もう一つは、Wickham に対する彼の酷い仕打ちである。

求婚される直前に、Elizabeth は Colonel Fitzwilliam の話を聞き、どうやら Darcy が姉と Bingley の関係性を邪魔した張本人らしいと考え、彼の求婚を拒否する。Fitzwilliam との会話の中で、Elizabeth は彼から、Jane には“some very strong objections against the lady” (182) があり、Darcy は両者の間を妨害するに至ったのだと知らされている。それに対する彼女の反応は、以下のようなものである。

...these strong objections probably were, her [Jane's] having one uncle who was a country attorney, and another who was in business in London. “To Jane herself,” she

exclaimed, “there could be no possibility of objection. All loveliness and goodness as she is! Her understanding excellent, her mind improved, and her manners captivating. Neither could any things be urged against my father, who, though with some peculiarities, his abilities which Mr. Darcy himself need not disdain, and respectability which he will probably never reach.” (182)

Elizabeth にとって、即座に思い当る自分たち姉妹の欠点は、地方弁護士の叔父と、ロンドンで商売を営む叔父という二人の階級の違う親戚である。彼女はさらに、Mr. Bennet と Darcy を比較し、自分の父親の方が、より優れた人物であると判断を下す。こういった思考からも、男性を判断するさい、Elizabeth が Mr. Bennet を基準として用いていることが分かる。

Elizabeth が、求婚を断った翌朝に Darcy から受け取った手紙には、姉の Jane と Bingley の関係を妨害した彼なりの理由が書かれていた。Darcy にとって彼らの結婚を有り得ないものとさせる最大の理由は、Elizabeth の予想に反して、父親も含めた彼女の家族の振る舞いにあると、手紙には記されていた。Darcy は以下のような文言で、ベネット家の面々の言動を非難している。

The situation of your [Elizabeth’s] mother’s family, though objectionable, was nothing in comparison of that total want of propriety so frequently, so almost uniformly betrayed by herself, by your three younger sisters, and occasionally even by your father. (193)

Darcy の言葉は、二つの意味で Elizabeth に衝撃を与えたと考えられる。一つは、Darcy が上流階級に属しているにもかかわらず、彼が近親者の身分の低さ以上に、Elizabeth の家族の振る舞いを非難すべき対象としたという点においてである。これは前日、Darcy が自分に求婚するのに用いた言葉とは、相いれないものである。そして、それだけに Elizabeth にとっては予想外の意見であっただろう。二つ目は、父親の振る舞いを含めた家族の行いが、姉の結婚を妨げるほど大きな欠点なのだと気づかされたことである。ここで重要なのは、Darcy に非難された父親を、Elizabeth がずっと盲目的に信頼していたのではない、ということである。彼女は Darcy から指摘される以前から、Mr. Bennet には、夫としても親としても、少なからず不満を覚えていたのである。

それでいて、現時点での自分を形成する要素として、多分に影響を受けてきた Mr. Bennet を否定すると、それまでの自分を否定することになってしまうがために、あえて父親の欠点を直視することを、Elizabeth は避けてきたのだ。Darcy はこの手紙に

おいて、彼女を支えてきた、自分の父親に関するプライドを打ち砕いている。そして、Mr. Bennet すら批判されることがあってしかるべきという、新たな評価の基準を、彼女は獲得したのである。

その後、Elizabeth は父親としての役割を放棄しているとして、Lydia が単身ブライトンへ向かうことを静観する Mr. Bennet に、それを止めさせるよう、直接提言するようになるのである。身内の行いが、階級以上にものを言うことに、Elizabeth が気づき、彼女の言動が変化したことが、この場面でははっきりと表れている。また同時に Darcy は、父親に対する Elizabeth が抱いてきた疑念を、初めて言葉にして表した人物ともなったのだ。

## 2-2. Charlotte の結婚

次に、Elizabeth の価値観の揺らぎについて、Charlotte Lucas との関係を通して検討する。彼女は、親友であり、良き理解者であったはずの Charlotte が、Collins と結婚したことによっても、考え方に変化をもたらされている。Elizabeth は、父親との会話の中で、届いた手紙の言葉づかいから Collins の人格を想定し、実際に会う前から、男性として失格の烙印を押してしまった。いざ対面してからも Collins に対する評価は変わらなかったが、Elizabeth は Collins に求婚されてしまう。そして、彼は Elizabeth との婚約が無理だと悟ると、すぐに Charlotte に狙いを移し、今度は成功する。Elizabeth は、そんな男性を選んだ Charlotte を、もはや理解することが出来ないと言うほど、親友との距離を感じている。

Charlotte の結婚を知った時の Elizabeth の気持ちは、Mr. Bennet の考え方と評価の基準が一致している。Mr. Bennet は以下のように娘の親友の結婚を評している。

Mr. Bennet's emotions were much more tranquil on the occasion, and such as he did experience he pronounced to be of a most agreeable sort; for it gratified him, he said, to discover that Charlotte Lucas, whom he had been used to think tolerably sensible, was as foolish as his wife, and more foolish than his daughter! (125)

Mr. Bennet は、Charlotte が結婚相手として Collins を選んだことに幻滅している。Elizabeth が Collins の求婚を断ったときも、もし彼と結婚するようなことがあれば、二度と会わないと言っていたほどである。自分の娘と Collins が結婚すれば、限嗣相続の問題が解決するにもかかわらず、Mr. Bennet は娘に愛情のない結婚をさせることはしない。ここで彼が、“as foolish as his wife”と考えているのは、単純に Mrs. Bennet と同等の知性しか Charlotte が持ち合わせていないというだけではなく、結婚相手を選ぶときに、最低限の財産の確保を優先すること自体を、見下していると考えられ



る。

しかし、実際に Collins 夫妻の生活を目の当たりにしたとき、Elizabeth の考え方は揺さぶられる。想像以上に器用に立ち回り、家庭を成り立たせる親友の姿や、Charlotte の Collins に対する扱いを見て、Elizabeth は幾度か感心させられている。例えば、“[Elizabeth] admired the command of countenance with which Charlotte talked of the healthfulness of the exercise, and owned she encouraged it as much as possible” (154) と述べられているように、健康を理由に夫を家から追い出す Charlotte の手腕を、Elizabeth は賞賛する。また別の場面でも、Elizabeth は Charlotte が居心地の良い食事室ではなく、奥まった部屋に陣取るのを不思議に思うが、すぐにそれが Collins の居場所を制限するための作戦であることに気づき、Charlotte の家庭での振る舞いに対する信頼を深めている。

この時 Elizabeth は、結婚相手が尊敬できない相手であったとしても、生活や人生そのものが破たんするわけではないことに気付いたのである。夫を立てながらも、裏からその行動を操作し、家庭を切り盛りする Charlotte の姿に、女性が家庭の中で持てる力に気づかされたとも言えよう。

### 2-3. ペンバリー訪問

Elizabeth は、大地主の妻になることの意義を、Darcy の屋敷を訪れることで実感する。物語の終盤で、いつから Darcy を想い慕うようになったのかと、Jane に問われた Elizabeth は、おそらくペンバリー屋敷を見てからだと答えている。彼女は、初めて屋敷を訪れたさい、窓から眺める景色に、“to be mistress of Pemberley might be something!” (235) と述べて、感嘆している。この「ペンバリー屋敷の女主人になること」とは、単に Darcy の妻になることではなく、Charlotte のように、その家を切り盛りしていく、まさしく屋敷の主人のような役割を果たすことまでが想定されていたのではないだろうか。

さらに、このとき Elizabeth は、ペンバリー屋敷の女主人になるという妄想から、Darcy の求婚を受け入れていれば、その妄想は現実のものとなっていたはずだという思考へと移っていく。以下にその部分を引用する。

“And of this place,” thought she [Elizabeth], “I might have been mistress! With these rooms I might now have been familiarly acquainted! Instead of viewing them as a stranger, I might have rejoiced in them as my own, and welcomed to them as visitors my uncle and aunt. —But no,” —recollecting herself, —“that could never be: my uncle and aunt would have been lost to me: I should not have been allowed to invite them.”

This was lucky recollection —it saved her from something like regret. (236)

ここに至って Elizabeth は、再び自身の親類の階級が低いことを思い出し、それを“lucky recollection”としている。なぜならそれは、彼女を“something like regret”から救ってくれたからである。

Darcy は先述のとおり、自分が Jane と Bingley の間に割って入った理由を、親類の身分の低さ以上に、母親や三人の娘たち、そして父親の不道徳な振る舞いにあると、手紙の中で Elizabeth に伝えていた。ところがここで彼女の思考を捉えたのは、またしても身内の階級である。この事実は、Elizabeth が、自分はペンバリー屋敷の主に相応しい相手として選ばれ、そこに住む資格があることを一度は認められたのだということに、自負心を抱いていることを示唆している。その自負心は、かつて自らの家族の振る舞いが Darcy に非難されたことを忘れさせ、自身の一番の欠点は、身内の身分の低さにあると、Elizabeth に考えさせるように働いている。

しかし、この考えはすぐに否定されることになる。なぜなら再会した Darcy は、Gardiner 夫妻こそが、かつて自分が非難していた、Elizabeth の身分の低い身内であることに気づかず、彼らを紹介してほしいと彼女に願い出たからである。以下にその紹介がなされた時のお互いの反応を引用する。

That he [Darcy] was surprised by the connexion was evident; he sustained it however with fortitude, and so far from going away, turned back with them, and entered into conversation with Mr. Gardiner. Elizabeth could not but be pleased, could not but triumph. It was consoling, that he should know she had some relations for whom there was no need to blush. She listened most attentively to all that passed between them, and gloried in every expression, every sentence of her uncle, which marked his intelligence, his taste, or his good manners. (244)

Gardiner 夫妻がここで果たした役割は大きい。なぜなら、Elizabeth と Darcy が共有していた概念、すなわち、身分の低い知り合いを持つことは自身の結婚にとって障害になるという価値観を、二人の目の前で崩してみせたからである。特に Elizabeth にとっては、父親以上の価値を、Mr. Gardiner の会話から見出すことに成功し、彼女に「勝ち誇った気持ち (triumph)」と「誇り (glory)」をもたらしたのだ。

以上で見てきたように、Elizabeth の既存の価値観は、Darcy によって父親を含む自身の家族を否定されたことによって大きく崩れ、親友の結婚、大地主の所有する土地を見ることを経て、少しずつ独自の価値観の獲得へと推移していったのである。

### 第三章 Darcy の価値観

#### 3-1. Darcy の反省

前章の最後で、Darcy の価値観も、Elizabeth 同様、Gardiner 夫妻との会話を通して崩れたことを確認した。初めて Elizabeth に求婚した際、Darcy は身分の低い身内がいることが最大の障害であると認め、彼女との結婚を、*degradation* という言葉を用いて表現していた。しかし、最終的に彼は、Gardiner 夫妻の徳の高さを、Mr. Bennet の持つ紳士階級の身分よりも優先することになる。Darcy が、Lydia の駆け落ちを解決するのに、Mr. Bennet との間で話を付けるのではなく、Mr. Gardiner を相談相手として選んでいるからである<sup>3)</sup>。

とはいえ、Elizabeth が Darcy の求婚を退けたときの言葉が、彼自身の価値観を揺るがしていたことは事実である。Elizabeth の言葉は、Darcy が父親に対する盲目的な尊敬を、改めて考え直すきっかけを与えたのである。

I [Darcy] have been a selfish being all my life, in practice, though not in principle. As a child I was taught what was *right*, but I was not taught to correct my temper. I was given good principles, but left to follow them in pride and conceit. Unfortunately an only son, (for many years an only *child*) I was spoiled by my parents, who though good themselves, (my father particularly, all that was benevolent and amiable,) allowed, encouraged, almost taught me to be selfish and overbearing, to care for none beyond my own family circle, to think meanly of the rest of the world, to *wish* at least to think meanly of their sense and worth compared with my own. Such I was, from eight to eight and twenty; and such I might still have been but for you, dearest, loveliest Elizabeth! (349)

Darcy の言葉は、一見すると自分の両親を擁護するような発言である。しかし、その実、彼らの教育に対する非難とも思われる。“I was spoiled by my parents”、あるいは“my parents who almost taught me to be selfish”という言葉は、特に自身の高慢な性格が、両親から植えつけられたものであったという、彼の考えを露わにしている。

Darcy が Elizabeth に「感謝の念 (*gratitude*)」を覚えるのは、偏にこの *selfish* な自分に気づかせてくれたことにある。それによって彼女は、Darcy にとって“*dearest, loveliest Elizabeth*”になりえるのだ。Elizabeth と Darcy の二人の結婚は、お互いがお互いの父親が植えつけた既存の価値観に影響を与えあうことで成し遂げられたとも言えよう。

### 3-2. 甘やかしの弊害

Darcy の受けた教育が彼に与えた影響について、さらに考察を発展させたい。彼は、Wickham がどのような人間かは、身近にいたゆえに以前から知っていたと、

Elizabeth に宛てた手紙の中で述べている。Mr. Darcy は気づかなかったが、自分には分かっていたと彼は言う。ここで疑問に思われるのは、なぜそれを父親に直接伝えることをしなかったのか、ということである。Darcy の父親に対する発言力が全くなかったとは考えにくい。彼は、甘やかされて育ったことを自覚している。おそらく Darcy の言うことは基本的に何でも聞いてくれるような父親であったはずである。では、なぜ Wickham の本性を父親に告げ口しなかったのか。それは、Darcy が Wickham を見下していたからだと考えられる。

見下していた、というよりは無関心であったのだろう。Wickham の父親の出自は、Darcy と比べてずいぶん低い。先の引用部分で、Darcy も認めているとおり、彼は自身の判断に過剰な自身を持っており、Wickham のような階級の出身者は、自身の人生に何ら影響しないと考えていたのだろう。しかしその考え方は、Wickham が妹 Georgiana との駆け落ちを画策していると知り、揺らいだはずである。

Darcy と Georgiana の関係は、兄妹でありながら、十歳という年齢の差もあり、父娘の関係にも近いことは、Darcy も自覚している。彼は、妹の駆け落ちを未然に防いだ経緯を、以下のような言葉で Elizabeth に説明している。

I joined them [Wickham and Georgiana] unexpectedly a day or two before the intended elopement, and then Georgiana, unable to support the idea of grieving and offending a brother whom she almost looked up to as a father, acknowledged the whole to me. (196)

この事件の数年前に、兄妹の父親である Mr. Darcy は亡くなっており、Colonel Fitzwilliam と Darcy が Georgiana の後見人として彼女の父親のような役割を担っていた。

Darcy の妹への接し方は、Mr. Darcy のそれと似通っている。ペンバリー屋敷の女中頭である Mrs. Reynolds は以下のように、兄の妹への態度を述べている。

“And this is always the way with him [Darcy],” she [Mrs. Reynolds] added.—“Whatever can give his sister any pleasure, is sure to be done in a moment. There is nothing he would not do for her.” (239)

Darcy は妹の駆け落ちに関しても、“She was then but fifteen, which must be her excuse” (196) と言っている。ということは、16歳の Lydia の駆け落ちも容赦されるのであろうか。Mrs. Young という世話人を選んだことについても、Darcy は、自身の人を見る目が無かったことは棚上げし、自分たちが彼女に騙されたのだと言って、彼女を

すぐに解雇したことだけを述べる。Darcy は、自らが Georgiana にとって父親のような存在であることは自覚しながらも、振る舞いに関しては自らの父親を手本にするしかなく、ただ妹を甘やかすというお粗末な教育に終始してしまっていたのである。

Darcy は、Elizabeth に二度目の求婚をし、受け入れられた後で、この手紙を書いた時には完全に落ちて書いて書いたつもりだったと述べる。しかし、そのあと当時の自分の状況を振り返り、それは“a dreadful bitterness of spirit” (348) とでも言うべき心境で書かれたと、前言を撤回している。そして、手紙を焼き捨てて欲しいとさえ、Elizabeth に頼んでいる。Elizabeth に、もっと紳士らしい振る舞いをしたらどうかという言葉を突き付けられた Darcy が、一晩のうちに、自身が甘やかされて育ったがために自己中心的になり、無意識のうちに高慢な人間へととなり果てていたことを反省したとは考えにくい。Darcy はこの手紙を Elizabeth に渡した後で、紳士らしい振る舞いについて、長い時間をかけて内省したに違いない。それゆえ、手紙の中で Elizabeth の家族の振る舞いを指摘したものの、自分自身のそれまでの言動に照らし合わせたときに、自身の振る舞いが適当であったという確信が、持てなくなったのだろう。

それでも、Darcy が Elizabeth の父親を非難したことと、Elizabeth が Darcy の人となりや非難したことは、それぞれがこれまでの生活の中心として考えてきた尊敬すべき父親の教えを疑い、見直すことへとつながった。そして、両者ともに、既存の考え方にとらわれない新たな価値観を形成していくことで、良好な夫婦関係を築くための土台が作り上げられたと考えられる。

## 結論

以上のように見てくると、『高慢と偏見』は、あたかも父権制への反発とも捉えかねられないような物語を形作っている。しかし、そうではないと考えられる。というのも、この物語で最も理想的な人物として扱われている Mrs. Gardiner が、二度にわたって Elizabeth に、父親を大事にしなさいという主旨の助言をしているからである。Elizabeth と Darcy の結婚が理想的なものであるのは、それが、人間として良く生きるために階級は関係ないということを、二人で共に理解しあう結果に至った結婚であったからではないか。

では、作者ジェイン・オースティン自身はどうであっただろうか。彼女は家の事情により、学校教育を最後までまっとうすることなく育っている。彼女の教えは父親によるところが大きく、彼は読書を生活の中心に置いていた。その点のみを取り上げれば、Mr. Bennet と Mr. Austen は共通項があるということになる。もしかすると、ジェイン・オースティンの中には、いかに子女としての教育を全うしようとも、いかに上流階級に生まれようとも、それで人間性が豊かになるわけではないという考えがあったのではないだろうか。

Ms. Elizabeth Bennet は、そんなオースティンの願いを叶えるかのように、自らの家族と、親類、親友や上流階級の間人達を観察することで、自ら学び、理想の結婚相手を手に入れるというゴールに辿りついている。Elizabeth がオースティンの一番のお気に入りであることはよく知られているが、その理由はそういったところにあるのではないだろうか。『高慢と偏見』の最後は、このように締めくくられている。

With the Gardiners, they [Elizabeth and Darcy] were always on the most intimate terms. Darcy, as well as Elizabeth, really loved them; and they were both ever sensible of the warmest gratitude towards the persons who, by bringing her into Derbyshire, had been the means of uniting them. (367)

もちろん、実際に Elizabeth と Darcy を結び付けたのも Gardiner 夫妻ではあるが、やはり、人間としての素晴らしさは、階級によって決まるものではないということを、二人に身を持って示してくれたことで、彼らはこの夫妻を「本当に愛する」ようになるのである。

## 註

- 1) Jane Austen, *Pride and Prejudice* (Penguin, 2014) からの引用。なお、以下この作品からの引用はこの版の頁数のみを示すこととし、引用箇所の下線は、全て執筆者によるものとする。
- 2) Steven Scott は、Mary に関して“She would like to please a father who spends all of his time in the library.” (Morrison 98) と推測している。
- 3) これに関しては別の理由も考えられる。それは、Mr. Bennet に解決の話を持ちかけてしまうと、自身の関与が Elizabeth に直接伝わってしまうことを恐れた可能性である。出来る限り自分が関わったことを彼女に知られなくなかった Darcy が、Mr. Bennet を避けて Gardiner 夫妻を仲介役として頼んだ可能性は大いにある。

## 参考文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Penguin, 2014.
- Austen-Leigh, J. E. *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollections*. Oxford UP, 2002.
- Faye, Deirdre Le. *Jane Austen's Letters Fourth Edition*. Oxford UP, 2011.
- Gilbert, Sandra M and Susan Gubar. *The Madwoman in The Attic: The Woman Writer and The Nineteenth-century Literary Imagination*, Yale UP, 2000.
- Miles, Robert. "Character." *The Cambridge Companion to Pride and Prejudice*, edited by Janet Todd, Cambridge UP, 2013. pp. 15-26.
- Morrison, Robert, editor. *Jane Austen's Pride and Prejudice; A Sourcebook*. Routledge, 2005.
- Page, Judith W. "Estates." *The Cambridge Companion to Pride and Prejudice*, edited by Janet Todd, Cambridge UP, 2013. pp. 97-108.
- Shields, Carol. *Jane Austen: A Life*. Penguin, 2001.
- Todd, Janet. "Jane Austen's Hero" *Pride and Prejudice*. edited by Donald Gray and Mary A. Favret. Norton, 2016.
- Tomalin, Claire. *Jane Austen*. Alfred A. Knopf, 1997.
- 新井英夫 「『高慢と偏見』にみるパターナリズム ——ベネット氏からダーシーに受け継がれるエリザベスの教育——」 松山大学論集、第 26 卷第 3 号、2014 年、117-42.
- 坂田薫子 「ベネット夫妻の言い分——ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見られる結婚の理想と現実」『日本女子大学紀要』文学部 58、2009 年、49-63.
- 廣野由美子 『深読みジェイン・オースティン：恋愛心理を解剖する』NHK出版、2017 年.



**The Ideal Marriage in *Pride and Prejudice*:  
Through Elizabeth's and Darcy's Views of Their Fathers**

TAKAHASHI Kazuma

**Summary:** Among Jane Austen's novels, *Pride and Prejudice* (1813) is said to be the happiest one because of the ideal marriage between Elizabeth and Darcy. First, this paper examines the relationship between Elizabeth and her father, Mr. Bennet, and then, discusses how his education influenced on his daughters, especially Elizabeth, in her choice of a partner. Second, we argue how her initial thoughts about her marriage gradually changed, influenced by several significant events such as Charlotte's marriage to Mr. Collins and Darcy's first proposal to her. Finally, we discuss Darcy's introspection about his relationship with his father, which is caused by Elizabeth's indication of his selfishness.